

をさなこち(幼心地) その五

クモの糸

南 出喜久治  
平成22年8月14日記す

今回は、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』（芥川龍之介全集 第三巻）岩波書店）についてお話します。  
これを要約すると、次のような短い童話です。引用した部分はカッコ書きしていますが、漢字をひらがな、カタカナにしたところもあります。

「ある日のことでございます。おシヤカさまは極楽のハス池のふちを、ひとりでぶらぶらお歩きになっていらっしやいました。「ハス池のふちにたたずん水の面にうかぶハスの葉の間から下の地獄のようすが見えています。」

そこに「かんだた」という男がいて、この男は「人を殺したり、家に火をつけたり、いろいろな悪事を働いた大ドロボウ」ですが、たった一つだけ善い事をしたことがありました。

それは、深い林の中を通ったときに、路ばたをはって行く小さくモを見て、踏み殺そうとしましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命をむやみにとるということは、いくら何でもかわいそうだ」と思ってクモを殺さずに助けたということです。

おシヤカさまは、「それだけの善い事をしたむくいには、できるならこの男を地獄から救い出してやろうとお考えになりました。えになりました。そして、ハスの葉の上にいた一匹のクモを手にとり、それを

「はるか下にある地獄の底へまっすぐお下しなさいました。」  
そのとき、カンダタも他の者と同じく血の池の地獄で苦しんでい  
ましたが、そこにクモの糸が自分の上に垂れてきたのを見て、「思  
わず手を打って喜びました。この糸にすがりついて、どこまでも  
のぼって行けば、きっと地獄からぬけ出せるに相違ございません。  
いや、うまく行くと、極楽へはいる事さえも出来ましょう。」と思  
いました。

そして、クモの糸を両手でしっかりとつかみながら上へと登りは  
じめました。しばらく登るうちに、くたびれて登れなくなりまし  
たので、一休みするつもりで、糸の中途にぶら下がりがら、はる  
か下の血の池を見下ろしました。そして、このまま登って行けば地  
獄からぬけ出せると思ひ、地獄に落ちてから何年も出した事のない  
声で、「しめた。しめた。」と笑いました。

「ところがふと気がつきますと、クモの糸の下の方には、数かぎ  
りもない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるでアリの行  
列のように、やはり上へ上へと一心によじのぼって来るではござい  
ませんか。」

自分一人でさえ切れそうな細い糸では多くの人数の重みにはた  
えられず、切れてしまえば、折角ここまで登ってきた自分までが、  
再び地獄に落ちてしまいます。カンダタは驚きと恐ろしさで、大  
きな声を出して、「こら、罪人ども。このクモの糸はオレのものだ  
ぞ。お前たちは一体誰のゆるしを受けて、登って来た？下りろ、下  
りろ。」とわめきました。

「そのとたんでございます。今まで何ともなかったクモの糸が、急  
にカンダタのぶら下がっているところから、ぷつりと音をたててき  
れました。」そして、カンダタは、ひとたまりもなく真逆さまに地  
獄へと落ちてしまいました。

「おシヤカさまは極楽のふちに立って、この一部始終をじつと見  
ていらっしやいましたが、やがて、カンダタが血の池の底へ石のよ  
うに沈んでしまいますと、悲しそうな顔をなさりながら、又ぶら

ぶらお歩きになりら始めました。自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、カンダタの無慈悲な心が、そうしてその心相当の罰を受けて、もとの地獄へ落ちてしまったのが、お釈迦様のお目から見ると、あさましくおぼしめされたのでございませう。」

こんなあらずじの話ですが、この話については、これまでいろいろな批評がなされてきました。たとえば、少し難しい議論になりますが、阿弥陀仏が教主である極楽の国に、どうしておしゃかさまが居るのですか、これはおしゃかさまではなく阿弥陀仏（如来）の誤りではないのですか、ここは阿弥陀仏の極楽ではなく釈迦の靈山（りょうぜん）浄土ではないのですか、などとった仏教的な疑問もありました。

しかし、もつと素朴で根本的なこととして、クモを踏み殺さなかったことが地獄から極楽へと救われるほどの善行（よいおこない）といえるのでしょうか、という疑問です。浦島太郎の話も、「助けた亀」でした。生き物をむやみに殺さないことは当然のことですが、だからと云って、この程度のことでも極楽に行けたり、竜宮城に行けたりするということも簡単に思ったりしては道徳的に立派な人にはなれないのです。

また、この物語の最後あたりに、「お釈迦様のお目から見ると、あさましくおぼしめされたのでございませう。」とあります。しかし、この表現に納得できない人が多いのです。「あさましい」と思うのではなく、おしゃかさまなら「あわれ」と思し召したはずだとするのです。

ともあれ、カンダタが自分だけ助かれば他人はどうでもよいとしたことから、クモの糸が切れてしまったことの意味するところは、おしゃかさまの教えが、自分ひとりの悟りのためでなく多くの人のためであるという大乗仏教の教えをやさしく説くためであ

ると思います。

しかし、クモの糸がカンダタの手元から切れた原因は、一体何だったのでしょうか。登ってくる多くの罪人の重みにたえきれずに物理的に切れたのでしょうか、おシャカさまが切ったのでしょうか、カンダタ自身の心の働きの作用で切れたのでしょうか、カンダタ自身が自分で切ったのでしょうか。それとも・・・

これを考えることに、この童話の真の意義があると思います。皆さんでそれぞれよく考えてみてください。